

自立活動学習指導案

L D等通級指導教室 1人(3年 女子)
指導者 北川 政人

1 題材名 漢字をおぼえよう

2 題材について

(1) 題材の価値

対象となる子どもは通常学級の第3学年に在籍し、本校のLD等通級指導教室で、自立活動と国語科、算数科の補充指導を週8時間受けている。在籍学級においては、特別支援教育支援員による学習支援も受けている。

日常生活においては、明るく活発で話すことも大好きであるが、注意集中の持続が難しく、認知の特性から、読み、書き、計算にも困難さを示している。しかしながら、「みんなと同じようにできるようにになりたい。」「本を読めるようになりたい。」「漢字を書けるようになりたい。」と強く願っている。

対象となる子どもが困難さを示している、読み、書き、計算に関しては、昨年度から自立活動として通級指導の中で取り組み、現在、平仮名五十音の読み書きに関しては、習得しつつあり、計算に関しても繰り上がり、繰り下がりのある筆算の計算はできるようになってきた。

そこで、本題材では、対象となる子どもが、書けるようになりたいと強く願っている漢字の書字を題材として設定し、平仮名を読み書きできるようになってきた自信を、漢字の書字にもつなげていきたいと考える。習得を目指す漢字は、第1学年の漢字とし、本題材においては60字を目安として読むことと書くことができるようにしたい。第1学年の漢字を30字程度を獲得した時点で、在籍している第3学年の漢字についても指導対象として入れていく配慮をしていきたい。

指導に当たっては、以下の点に留意する。

- ・ 子どもの書字段階に合わせて指導課題を設定できるように、事前に対象児に書字の発達段階評価を行い、今できているところと課題とを明確にして、指導計画を立てるようにする。
- ・ プリント教材で指導する文字や単語をよく検討し、生活の中でよく出会う単語にイラストや写真などと一緒に意味を理解することができるようにし、音韻として記憶している単語について書くことができるように指導する。
- ・ 処理スピードが遅いので、1単位時間で三つの漢字を習得することを目標にして、書字に対する抵抗感を軽減する。
- ・ 同時処理が強いので、漢字の筆順の1画目を赤、2画目を青、3画目を黒にすることによって、視覚的に書き順をとらえて正しい筆順で書くことができるようにする。
- ・ 保護者、在籍学級担任、通級指導教室担当、特別支援教育支援員が連携して、目標を共通理解した上で家庭学習や国語科の中でも書字指導を行い、学習した漢字を日記や宅習で使えるようにする。

(2) 題材の目標

- 第1学年の新出漢字80字の中の、60文字を読むことができる。
- 第1学年の新出漢字80字の中の、60文字を正しい筆順で書くことができる。

【習得を目指す漢字】

一	四	七	十	山	月	木	林	日	右	下	手	金	字	車	子	赤	男	竹	学
二	五	八	口	石	火	休	森	中	左	名	足	生	千	力	先	青	女	草	文
三	六	九	人	川	水	大	土	目	上	早	耳	王	天	入	田	白	見	花	校

- 第3学年の漢字を読むことができる。

【指導する漢字】在籍学級の国語の単元「すがたをかえる大豆」で現在学習している漢字
新出漢字の読み「大豆」「取る」「植物」「消化」「時期」「整理」「畑」「終わり」

(3) 子どもの実態

ア 心理検査結果分析から

LD児の支援のために必要な実態調査としてWISC-Ⅲ検査とK-ABC検査を行い、行動観察と関連付けて認知情報処理特性を明らかにし、指導プログラムを作成する際に生かすことができるようにした。

WISC-Ⅲ検査から	K-ABC検査から
<ul style="list-style-type: none"> 全検査IQでは知的発達は境界線上であり、大きな遅れはないと考えられる。 言語性IQが動作性IQに比べて低く、認知の偏りが強い。 群指数では、「知覚統合」「言語理解」は強いが、「注意記憶」「処理速度」は弱い。 言語性検査の「単語」が強く、動作性検査の「符号」は弱い。 	<ul style="list-style-type: none"> 認知処理過程尺度では、著しい遅れはなかったものの、「同時処理尺度」に比べて「継次処理尺度」が低く、認知の偏りが強い。 認知処理尺度に比べると習得度尺度が低く、もっている力をうまく使って学習できていないと考えられる。 継次処理では「語の配列」が弱く、同時処理では「視覚類推」が強い。
<p>行動観察と検査から考察する子どもの認知の特性について</p> <p>注意を持続させて、聴覚的な情報を正確に取り込み、記憶することが苦手である。覚える事柄を意味付けすると覚えやすくなると考えられる。</p> <p>視覚的情報を統合し、構成することは得意であるため、図や絵などを補助的手段として用いると、定着を図ることができると考えられる。</p> <p>処理スピードがゆっくりなので、時間を十分に確保する配慮が必要である。</p>	<p>行動観察と検査から考察する子どもの認知の特性について</p> <p>継次処理より同時処理が得意なところから、対象となる子どもは順序に従って処理することが難しいために、系列的な学習の習得に困難をきたすことが考えられる。算数の繰り上がりや、単語や綴りの書字、話し言葉の処理などに困難さがあると考えられる。また、同時処理が得意なことから、問題を視覚的に提示し、図や絵によって意味付けすると理解しやすくなると考えられる。</p>

イ 書字の発達評価から

LD児の書字支援のために必要な実態調査として発達の観点での評価を行った。

書字の発達段階を評価するにあたって「LD児のためのひらがな・漢字支援～個別支援に生かす書字教材～」(編著：小池敏英・雲井未敏・窪島務 あいり出版)の中の「書字の発達段階評価」を活用した。正答率は100% (全問正解)をAとし、26%～100%未満をB、0%～25%以下をCとし、その評価結果をAを **太枠**、Bを **点線枠**、Cを枠なしに書き表し、指導の対象となる課題を明らかにした。(平成23年9月13日実施)

課 題	正率	A太枠 B点線枠 C枠なし
(1) ひらがな文字		
①文字の形態識別 (文字→文字)	A	
②音韻識別 (音声→音声)	A	
③文字の読み (文字→読み)	A	
④読みが提示されて、文字の選択 (読み→文字)	A	
⑤書字の模倣 (筆順運動→筆順運動)	B	
⑥文字が提示されて筆順運動の実行 (文字→書字)	B	
⑦読みが提示されて、書字 (読み→書字)	B	
(2) ひらがな単語		
①文字の形態識別 (文字→文字)	A	
②音韻識別 (音声→音声)	A	
③音節の抽出・分解	A	
④文字の読み (文字→読み)	B	
⑤読みが音声提示されて、文字の選択 (読み→文字)	A	
⑥書字の模倣 (筆順運動→筆順運動)	B	
⑦文字が提示されて筆順運動の実行 (文字→書字)	B	
⑧読みが提示されて、書字 (読み→書字)	C	
⑨文字が提示されて意味を言う (文字→意味)	B	

(3) 特殊音節の単語		
①文字の形態識別 (文字→文字)	A	
②音韻識別 (音声→音声)	B	
③文字の抽出・分解	C	
④文字の読み (文字→読み)	B	
⑤読みが提示されて、文字の選択 (読み→文字)	C	
⑥書字の模倣 (筆順運動→筆順運動)	C	
⑦文字が提示されて、筆順どおりの書字 (文字→書字)	C	
⑧読みが提示されて、書字 (読み→書字)	B	
(4) 基礎的漢字 (漢字は1年生の学習漢字)		
①漢字の形態識別 (文字→文字)	A	
②漢字の読み (文字→読み)	C	
③読みが提示されて漢字の選択 (読み→文字)	C	
④書字の模倣 (筆順運動→筆順運動)	C	
⑤漢字が提示されて、筆順どおりの書字 (文字→漢字)	C	
⑥読みが提示されて書字 (読み→書字)	C	
⑦文字が提示されて意味を言わせる (文字→意味)	C	

上記の実態を踏まえて、2学期前半の指導を「特殊音節の単語の読み書き」、後半の指導を、「第1学年の基礎的漢字の読み書きの習得」と設定した。

3 指導に当たって (研究との関連)

「子どもの『見通しをもって学習する力』・『自分で決める力』・『他者に伝える力と聞く力』を育むICTの活用」

- 同時処理が強いという子どもの認知処理能力を生かすことができるように、漢字の書字の支援ソフトウェア(「LD児の漢字学習とその支援」小池敏英・雲井未歎・渡邊健治・上野一彦 編著 北大路書房)を活用し、漢字を分かりやすく、楽しく習得することができるようにする。

「子どもの伝えたいという気持ちを高め、日常生活に生かす単元や題材の工夫」

- 本題材では、習得した漢字を子ども自らが保護者に連絡帳をもとに伝え、家庭学習においても学習した漢字を読んだり書いたりする練習をすることで、日常生活においても、学んだ漢字を使ったり読んだりすることができるようにする。

4 指導計画 (全23時間)

次	時間	主な学習活動		教師の支援	
次		1年生漢字	3年生漢字		
一	1	一 二 三		○ 子どもの認知特性に応じた援助のあるワークシートを使うことで、漢字を習得しやすくする。 ○ 在籍学級担任、特別支援教育支援員と連携し、家庭学習用のワークを準備する。 ○ その時間に習得した漢字を書いたコインを作り、それを増やすことで、漢字をたくさん覚えていることが実感できるようにする。	
	2	四 五 六			
	3	七 八 九			
	4	十 口 人			
	5	山 石 川			
	6	月 火 水			
	7	木 休 大			
	8	林 森 土			
	9	日 中 目			
	10	右 左 上			
	11	30字を振り返る。			
二	12	下 名 早	大豆	○ 3年生の国語科の単元「すがたをかえる大豆」に出てくる新出漢字も、読むことができるようになることで、漢字の書字への意欲を高めることができるようにする。 ○ 3年生の漢字の読みを習得できた際には、在籍学級担任に連絡し、国語科の授業の中で読みを尋ねたり、称賛する機会を作ってもらえるように連携する。	
	13	本 手 足 耳	取る		
	14	金 生 王	植物		
	15	字 千 天	消化		
	16	車 力 入	時期		
	17	子 先 田	整理		
	18	赤 青 白	畑		
	19	男 女 見	終わり		
	20	竹 草 花			
	21	学 文 校			
	22	30字を振り返る。			
	23	まとめ			

5 本時(10/30)

- (1) 目標 漢字の「手」「足」「耳」「取る」を読むことができる。
 (2) 展開

また、「手」「足」「耳」は筆順に気をつけて、「取る」は筆順に気をつけて、書くことができる。

☆はICT活用の留意点

過程(分)	主な学習活動	教師の指導
つ か む (10)	1 はじまりのあいさつをする。 2 家庭で取り組んだ宿題を教師が確認する。 3 前時までに学習した漢字について、ICTを使って振り返る。 (神経衰弱) 4 本時の活動を知る。 5 本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 三つのかんじ、「手」「足」「耳」(取る)をおぼえよう。 </div> (1) めあてを言葉に出して読む。 (2) めあてをワークシートに書く。 (3) 活動を確認する。	○ 家庭学習で丁寧に書いていたところなどを取り上げて称賛すること、家庭学習への意欲化を図る。 ☆ これまでの学習を振り返る際に、ICTを使って教師と楽しく漢字の神経衰弱を行うことで、子どもが意欲をもって学習に取り組むことができるようにする。
み と お す (5)	☆ 漢字の読みの習得の際には、コンピュータのソフトウェアによる見本合わせ課題を活用し、音声による見本刺激と提示された漢字の選択刺激を子どもが選ぶことで、楽しみながら漢字を読むことができるようにする。 ○ これまでに学習してきた漢字の履歴や数が、視覚的に分かるように掲示しておくことで、漢字の学習の定着を実感しながら、自信をもって取り組むことができるようにする。 ○ 書く量を調節したり、体を動かさず活動を取り入れたりすること、注意集中が持続できるようにする。 【同時処理が得意な子どもに有効な支援として】 ○ 筆の運びを支援するために、なぞり線を1画と2画の書き出し部分が赤と青の2色で表示されたワークシートを使うことで、正しい筆順で漢字を書くことができるようにする。 【同時処理が得意な子どもに有効な支援として】 ○ 多分割された漢字を合成して、一つの漢字を作り出す活動を行うことで、漢字を組み立てることが簡単であることを実感することができるようにする。	☆ 分割漢字を構成する課題を容易に作成できるソフトウェアを活用することで、短時間で子どもの教材を作り出すことができるようにする。 ○ 家庭学習用のワークを教師とともに確認し、本時で書くことができるようになった漢字について、子どもが保護者に自分から進んで伝えることができるようにワークを準備する。
か つ ど う す る (25)	6 漢字パワーアップ道場で漢字の修行をする。 【漢字パワーアップ道場】 ① 今日の漢字を読んでもみよう。・三つの漢字と「取る」 ② 漢字の合成ゲームをしよう。(神経衰弱) ③ 筆順と形を覚えよう。 ④ 書いてみよう。 ⑤ 今日の漢字コイロンを作ろう。	
ふ り か え る (5)	7 本時の活動を振り返る。 ・ 書けるようになった漢字について、発表する。 8 今日の宅習「漢字ワーク」の確認をする。	